

# 水と森林を守る取組が続々登場

## シンポジウム「美しい森林と美しい水」

12月3～4日に、「第一回アジア・太平洋水サミット」が大分県別府市で開催され、福田首相をはじめアジア・太平洋地域の国家首脳などが集まり、水問題の解決に向けた取組を進めるための議論が行われました。

このサミットの公式関連イベントとして別府市内を中心に様々な催しを実施され、シンポジウム「美しい森林と美しい水」も、こうしたイベントの一つとして12月1日に開催されました（社団法人日本治山治水協会主催）。水と森林を守る地域の取組などを紹介する公開シンポジウムで、筑波大学の恩田准教授による基調講演と東京農業大学の太田猛彦教授による特別講演が行われ、日本、海外の四つの事例が発表されました。

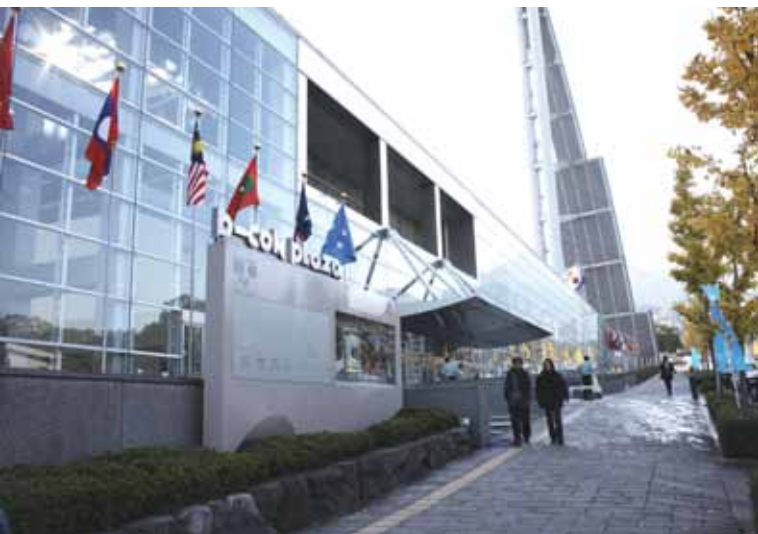


### 人工林の機能を回復させる 強度間伐の必要性

― 一番初めに壇上にも上がられた恩田准教授の基調講演では、「美しい森林と美しい水 人工林の荒廃が水・土砂流出に及ぼす影響」と題し、森林の公益的機能のうち、とくに水源

かん養機能と土砂流出防止機能について、荒廃したヒノキ人工林と広葉樹林における水・土砂流出についての詳細な観測結果を中心に講演されました。

荒廃した人工林は林床の裸地化をまねき、降雨時に表面流出を発生させ土壌浸食や河川における濁水の発生につながります。このことから、特にヒノキ人工林の荒廃が水・土砂流出に与える影響等の予測のため、東京、長野、愛知、三重、高知で実地観測が行われた様子を写真とともに解説されました。洪水時に採取された数千に及ぶサンプル分析によって、荒廃したヒノキ人工林からの土砂流出の特性や、浮遊土砂の生産源別の寄与率などがわかってきたことが示されました。



上：立ち見も出た会場では講演や発表、質疑応答が行われました  
下：会場となった大分県別府市ビーコンプラザ。サミットもここで行われました



基調講演を行う筑波大学の恩田准教授

荒廃した人工林の機能回復のためには思い切った強度間伐を行い、林内に光が入るようにするにより林床の植生の再生を図ることが必要だと提言されました。

## 村づくりにつながる 中津江村の森づくり

続いて、中津江村地球財団の前優一氏が発表した「よみがえれ海のめぐみと大地のめぐみ」筑後川の水源を守る『二〇〇海里の森づくり』。中津江村（現日田市）は、実に村の面積の九〇％が森林です。昭和三十年代から四十年代にかけて、ダム建設による住民の流出や鯛生金山の閉山などにより若者が都会へと流出し、平成十七年の日田市との合併後も

人口減少が続いています。また、農林業従事者は昭和六十年と比べると四〇％減少したこともべられ、中津江村の深刻な現状が浮き彫りになりました。

そんななか、平成三年の台風被害をきっかけにボランティアによる森林保全活動が始まり、平成十二年からは筑後川を介して村の歴史と関わりの深い下流域の福岡市民や大川市民、ボランティア団体も参加して「二〇〇海里の森づくり」事業が開始されました。毎年旧中津江村役場が中心となって秋から冬場に植林し、夏場に下草刈りなどを行い、合併前の平成十六年までに延べ三千人以上が参加する活動に成長しました。合併後、この事業は財団法人中津江村地球財団に引き継がれ、二〇〇海里の森づくり実行委員会が設立されました。森林保全による安定した水資源の確保を目的とした事例として、将来が大きく期待されます。

## 楽しさと社会貢献を両立する 市民主体のボランティア活動

矢作川水系森林ボランティア協議会からは、代表の丹羽健司さんが「森の健康診断・市民参加による流域保全」を発表されました。愛知県矢作川流域ではじまった活動で、森林ボランティアが研究者の協力を得て考えだした調査法により本格的な林業調査を行うものです。

森の健康診断では、参加者がチームを組んで放置された人工林を回り調査します。調査器具も百円均一で揃うものを利用するなど、手軽に誰でも参加できる工夫がなされています。熟練の森林ボランティアのリードにより、初心者が楽しみながら森林調査に参加でき、しかも、調査結果は研究者による専門的な分析を経て、流域の森林の「森の健康診断」の報告書として公表されます。子どもでもわかりやすく楽しく参加できるプログラムも開発中とのことでした。

「効率を追わない」「市民と専門家が対等な立場で関わる」「科学的精度よりも参加者の楽しみを重視」「参加費を取って運営する」という四点が調査の特徴としてあげられました。活動に参画する専門家は「専門分野のずれ」「分野外への踏み出し」「社会提言」をできることが必要であるとしています。楽しみと社会貢献を両立させ、研究者を巻き込んで活動しながら次世代の人材も育てようという非常に有意義な取組を行っています。

## 大分県の森林環境税事業は 県民中心・県民参画が特徴

大分県農林水産部・森との共生推進室の近藤孝昌氏は「森林環境税」独自課税による新たな森林づくり」と題し平成十八年度に導入された森林環境税について発表されました。大分県は県土の七十二％を森林が占め、その



左上：大分県農林水産部・森との共生推進室の近藤氏  
 左下：農林水産省（元ラオス国農林省農林業普及局）の五関氏

右上：事例発表を行う中津江村地球財団の前氏  
 右下：矢作川水系森林ボランティア協議会代表の丹羽氏

うちの九割が民有林で、森林が県民の財産ともなっています。

大分県では、森林ボランティアが広がりをみせる一方で、社会・経済情勢や人々の生活様式の変化により人工林も里山林・自然林もともに荒廃が進んでおり、森林の公益的機能の低下や自然に無関心な社会の出現、子どもの自然体験の減少などの問題に対応するため、森林環境税が創設されました。

大分県の森林環境税の特色は県民中心・県民参画にあります。税収の用途は、県民からの提案を元に、地域の森林づくりは県内四地域に設置した森林流域協議会、県全体の森林づくりは大分県森林づくり委員会を中心に決められます。関心のない人へのアプローチ、持続可能な森林管理、将来を見据えた森林づくり、次世代を担う子どもたちの森林自然体験の推進などの事業が展開されています。

こうした事業の成果として、ボランティア数の増加、NPO、企業、大学からの森林づくり参加、上下流連携や地域が一体となった森林づくり、荒廃森林の整備の進展があげられました。森林環境税は全国的にも導入が進んでおり、近県の森林ボランティアから質問が出るなど注目されている様子が伺われました。

## ラオスで

### 森林荒廃抑制活動を展開

農林水産省（元ラオス国農林省農林業普及



特別講演を行う東京農業大学の太田教授

局)の五関一博氏からは「海外での取組・焼畑農民参加によるナムグム湖流域保全」としてラオスにおけるJICA海外技術協力の事例が発表されました。一九九六年から二〇〇三年までの期間ナムグム湖近隣の二郡十五カ村を対象地域として「森林荒廃抑制のために住民参加型森林管理を促進するための地方行政組織「ヴィエンチャン県農林局」の能力が向上する」ことを目標に実施されたプロジェクト方式技術協力です。

ナムグム湖は琵琶湖の半分の面積がある非常に大規模なダム湖です。その近隣の山では過度の焼畑のため、チガヤに覆われ森林が再生しない荒廃地が広がっていました。そこで、村落共同林造成への支援を行い、生活

向上のために簡易水道を引き、村人による植林活動などを展開しました。また、林地にパインナツプルを混植するアグロフォレストリーや女性グループによる紙漉き・紙布織りの導入によって、焼畑に頼らず生計を立てられるように現金収入源を確保しました。

プロジェクトの主な成果として、村落森林管理計画策定や住民による森林管理手法の確立、住民の生計向上、地元行政官や村落リーダーの育成などがあげられました。さらに、今後のプロジェクトの展開方向として、ラオス北部など他地域への普及・展開を推進すること、ラオス側の主体性を強化すること、植林と農業、木材以外の林産物を組み合わせることがあげられました。日本の海外技術協力が地元密着型で展開され効果をあげている好例です。

### 健全な森林土壌による 水源かん養機能の発揮

最後に壇上上がった太田猛彦教授による特別講演は、「水保全と新しい森林管理」と題し、森林の水源かん養機能とはいかなるものかや、日本人の木材利用と森林の状況の変遷について歴史を遡ってわかりやすく説明されました。

森林の水源かん養機能には、洪水緩和機能が、水資源貯留・水量調節機能、水質浄化機能があり、水源かん養機能を発揮する主体は健全

な森林土壌にあることを説明されました。健全な森林土壌とは、落ち葉や枯れ枝の層、下草で覆われた森林土壌のことで、人工林でも天然林でも健全な森林土壌が維持されていれば水源かん養機能は発揮されます。このような働きについてもっと理解して欲しいと訴えられました。

さらに日本の植生(森林)の変遷を語られ、森林・里山の荒廃は古代都市の成立とともに始まり、明治中期が歴史上もっとも荒廃していた時期であり現在は人工林が成長し里山の森林が復活した結果、かつては日本中で見られたはげ山が今では姿を消し、数百年ぶりに森林が回復している事実をあげられました。そのうえで、現代の森林は量的に豊かであるものの放置された里山、手入れができない人工林、生物多様性の喪失など質的な荒廃が問題となっていると指摘されました。

また、森林の多面的機能について、その階層性や定量的評価の難しさ、水源かん養機能と木材生産機能の両立性などの特徴をあげられ、今後はこれらの特徴に即した森林管理が必要と提言されました。

シンポジウム当日は、一三〇ある椅子席がすべてつまり、立ち見が出るほどの盛況ぶり。森林・林業関係者だけでなく、一般の方々も多く来場され、市民の水と森林に対する関心の高さを感した行事となりました。